

熊本県文化財調査報告 第53集

# 赤見前田遺跡

— 下益城郡城南町赤見字前田所在遺跡の調査 —

1981

熊本県教育委員会

# 赤見前田遺跡

— 下益城郡城南町赤見字前田所在遺跡の調査 —

熊本県教育委員会

## 序 文

近年、公共事業に伴う埋蔵文化財の調査件数が増加しています。ここに報告する遺跡も、県営圃場整備事業に伴って発掘調査を実施したものです。幸い、工事による遺跡の削平は最少限度に止められ、遺跡の大部分は新しい圃場の下に保存されることになりました。

この調査は発掘面積も狭く、調査の成果という点では必ずしも満足すべき点ばかりではありませんが、地域住民の生活と密着した圃場整備と文化財保護との調和という観点からすると、喜ばしいことであると考えています。

この報告書が、貴重な文化財の記録として県民をはじめ広く一般に利用され、文化財理解の一助となれば幸いです。

調査にあたっては、県農政部、県宇城事務所、城南町教育委員会並びに地元の方々から全面的な協力を受け、調査が円滑に遂行できましたことに対し、ここに厚くお礼を申しあげます。

昭和56年 3月31日

熊本県教育委員会

熊本県教育長 外村次郎

## 例　　言

1. 本書は、県営圃場整備事業（緑川南部地区）に伴い、熊本県教育委員会が発掘した赤見前田遺跡（下益城郡城南町赤見字前田）の調査報告である。
2. 本書の執筆には主として豊崎亮一があたり、一部を松本健郎が行い、その分担は文末に示した。
3. 本書に使用した図及び写真は豊崎によるものである。
4. 本書の編集は熊本県教育庁文化課で行い、豊崎が担当し、松本がこれを援助した。



赤見前田遺跡位置図

## 本文目次

I 調査に至る経過.....	1
II 調査の記録.....	2
1. 周辺の遺跡.....	4
2. 調査の経過.....	6
3. 試掘溝の設定.....	9
4. 調査結果.....	9
(1)土層.....	10
(2)遺構・遺物出土状態.....	11
(3)遺物.....	16
III 総括.....	25

## 挿図目次

第1図 周辺遺跡分布図.....	3
第2図 調査区地形図.....	7
第3図 トレンチ設定図.....	8
第4図 A地区土層断面図.....	11
第5図 A地区遺物出土状態.....	12
第6図 B地区 b - 1 遺構、断面実測図.....	13
第7図 B地区 b - 2 遺構、断面実測図.....	14
第8図 出土遺物実測図.....	17
第9図 出土遺物実測図.....	19
第10図 出土遺物実測図.....	21
第11図 出土遺物実測図.....	23
第12図 出土遺物実測図.....	24

## 表目次

周辺遺跡一覧表.....	5
--------------	---

## 図版目次

図版 1 A地区調査風景・遺物出土状況.....	29
図版 2 B地区 b - 1 遺構検出状況・同区調査風景.....	30
図版 3 B地区 b - 2 III層遺構検出状況.....	31
図版 4 遺物出土状態.....	32
図版 5 出土遺物.....	33
図版 6 出土遺物.....	34
図版 7 出土遺物.....	35

## I 調査に至る経過

昭和55年10月、下益城郡城南町赤見字前田一帯を踏査中の森栄一・豊崎晃一（城南町教育委員会）は、周辺で実施されていた県営圃場整備事業（緑川南部地区）において掘削中の水路から、土師器・須恵器・青白磁等が出土しているのを確認し、県文化課上原遺跡調査事務所（下益城郡城南町塚原）に連絡した。この連絡を受けて、上原遺跡の調査に従事していた文化課技師・村井真輝、同学芸員・野田拓治両名が現地を踏査のうえ文化課に状況を連絡した。

文化課では、県耕地一課と連絡の上、問題の処理のため早急に協議を進めることとし、昭和55年10月29日、城南町教育委員会・県耕地一課・県宇城事務所耕地一課立合いのもと再度現地踏査を実施した。この時点で、水路の掘削は一部の地区を除いてすでに完了に近い状態であったが、未掘削部分周辺にかなりの遺物の散布を認めたため、発掘調査が必要であることを確認した。なお、その他の部分については、もともと地形が平坦であり、工事による削平をほとんど受けないことから、調査対象から除外した。

踏査終了後、県耕地一課の依頼により、文化課で調査を立案し、調査経費は県耕地一課の負担で調査を実施することとなった。

折りしも、文化課の調査員はすべて他の調査に従事しており、一方では水路掘削は急を要することから、城南町教育委員会の全面的な協力により、豊崎晃一を一時文化課臨時調査員に任じ、調査を実施するに至った。

（松本健郎）

調査の組織は次のとおりである。

調査主体	熊本県教育委員会
調査責任者	岩崎辰喜（文化課長）
調査総括	隈 昭志（文化課文化財調査係長）
調査総務	田辺宗弘（文化課長補佐）・大塚正信（文化課経理係長）・矢野みゆき（文化課主事）・横尾泰宏（文化課技師）
調査員	豊崎晃一（文化課臨時調査員）
調査協力	県農政部耕地一課・県宇城事務所耕地一課・花田建設・城南町役場・城南町教育委員会・富樫卯三郎（肥後考古学会長）・徳本明・堀坂光雄（赤見区長）・平山修一・高木恭二・木下洋介（以上宇土市教育委員会）・村井真輝・松本健郎・高木正文・野田拓治・勢田広行・古森政次・廣瀬正照・森山栄一・清田純一・浦田信智（以上文化課）
作業員	北坂三春・河崎砂子・伊津野カズエ・中島正子・堀坂多美・三原タツエ・京イツ子・白石エイ子・平江芳子・伊津野征子

## II 調査の記録

今回の調査は、発掘によって遺構及び遺物包含層の有無を知る事が目的である。調査予定地は水路掘削予定地で、付近からは、弥生式土器片、古墳時代、歴史時代の遺物が採集されている。赤見前田遺跡は、付近を蛇行して流れる緑川（同遺跡より北へ約3km）と浜戸川（同じく南西へ約2.8km）により形成された沖積低地にある。以前は、河道か河床内の流路により浸食と堆積を繰り返したと思われる。赤見、又その周辺の村落は数条の水路をもち、湧水量も多い。調査においても、水による影響で多くの困難を余儀なくされた。遺跡付近の地形は、水田地帯で、平野部は東側からなだらかな傾斜をもち、標高は3.5m前後である。

調査は、時間的制約もあり、掘削機による表土除去作業から始めた。この作業によりA・B調査区とも、わずかの遺物を検出したが、遺構の存在は確認できなかった。

A地区はトレンチとグリッドを併用して調査を進めたが、遺物出土状況や断面観察などから、遺構、遺物包含層はないと判断した。調査用具は、スコップと移植ごてを使用した。遺物はグリッドと層ごとに取り上げ、レベルは使用しなかった。ただ五輪塔片と宝鏡印塔片に関しては、出土状況（第5図）の実測を行った。断面観察は東西と南北（H-1～2）を行い、A地区は4層を検出し、断面実測を終ったところで、調査を切りあげた。

B地区は表土剥ぎを行った後b-1、b-2のI層まで同時に掘り下げた。その結果、ピット状遺構を両地区から検出した。遺構を掘り上げた後、実測、写真撮影を行う。断面観察や遺物・遺構の出土状況から考えて、b-1・b-2区には古墳期と思われる遺構と遺物の存在が有力となった。さらにIII層まで掘り下げる途中、B地区的水路拡張中にIII層の下部より、高壙2個が出土した。この事から最終調査面は、III層の下部まで掘り下げなければならない事が予想された。

II層を掘り上げた結果、多量の古墳期の遺物を検出した事で、II層は遺物包含層である可能性が強くなる。III層上面まで掘り下げ、溝状遺構とピット状遺構をb-2区で確認する。遺構を掘り上げ、遺構の実測、撮影の後に、b-2区東側の高壙が出土した場所の周辺からさらに下へ掘り下げる。このころから、湧水が激しく調査が困難になった。それまで使用していたスコップや移植ごてでは、遺物が水面下より出土する事などから、使用出来ず、人の手によって行う。調査は難航したが、III層下部より多くの遺物が出土した。それからB地区的b-2区の東側を中心に、遺物を出土した高さまで掘り下げるが、東側のみで他からは何ら遺物、遺構の検出はなかった。b-1区も同様であった。

一応III層の下部まで掘り下げ、b-1区の東西南北側の断面、b-2区の西・北側断面の断面実測の後に、B地区的調査を終了した。

最後に、付近の水路面に観察されるV字状の遺構や周辺の地形の平板測量などを行い調査を終った。  
(豊崎晃一)



第1図 周辺遺跡分布図

## 1. 周辺の遺跡

赤見前田遺跡は、熊本県下益城郡城南町赤見字前田に所在する。

同遺跡は熊本平野の南部に位置し、緑川とその支流である浜戸川などにより形成された沖積低地に位置する。このあたり一帯の気象は内陸盆地的気象で、寒暑の差が著しく、台風時や梅雨期に降る雨量は多く、前線の停滞による水害なども多い。

城南町には古代より多くの遺跡が散在している。特に縄文期においては著名な遺跡が多く残る。中でも阿高、御領貝塚は九州の縄文式土器の編年においても重要なものである。又最近水害により発見された黒橋貝塚は両貝塚の中間的な存在として、貝塚の広がりとしてもその学術的価値は高い。<sup>注①</sup> 阿高、御領貝塚は木原山の東麓、浜戸川に沿った丘陵の斜面にある。御領貝塚より西北に約250mの距離に縄文中期の阿高貝塚、さらに北方崖下の浜戸川をへだてた約400mのところに黒橋貝塚がある。その他早期の沈目式土器の出土地である沈目遺跡や、縄文晚期の貝塚なども多い。

弥生時代は、現在のところ弥生前期と思われる遺跡は少ないが、弥生中後期のおもな遺跡の分布は、宮地、隈庄、平野、赤見、永、碇、高、阿高、塚原、沈目、陳内、藤山、尾窪、鰐瀬、土鹿野などがある。特に城南町の中心部から舞原台地の南西部宮地・中宮地・隈庄・沈目付近に多数の遺跡がある。宮地付近からは石劍や甕棺、又いわゆる「皮袋形脚付土器」などが出土している。貝塚は中尾貝塚、岡貝塚がある。中尾貝塚は未調査であるが、岡貝塚は調査されている。岡貝塚の下層より弥生式土器とともに、石包丁・鹿骨・猪骨などが検出されている。<sup>注②</sup> 甕棺も須玖式から黒髪式にかけてのものが溝口、西福寺・今・西原などから見つかっている。住居址は塚原上原・天神原・沈目奥野から検出されている。支石墓は城南町の西隣りの富合町木原字西藏から発見されている。弥生末期の土器や土師器は水田地帯の碇・永・赤見・高などに見られ、しだいに台地から低地へ移っていったと思われる。

古墳時代にみると、城南町内には多くの古墳群が出現する。おもな古墳群をあげると、吉野山周辺の古墳群、塚原古墳群、阿高・尾窪の横穴群がある。その他沈目の甚九郎山古墳、陳内の孤塚古墳、同じく天ノ平横穴群などがある。特に塚原古墳群は昭和47年からの調査で幅60m、長さ500mの調査区内から、方形周溝墓34基を含む円墳、前方後円墳など計101基の古墳が発見された。その結果、塚原古墳群は中九州において古代墓制の重要な遺跡となった。赤見前田遺跡より東側の台地にある吉野山周辺の古墳群の多くは破壊されているが、吉野山山頂古墳や坂本古墳（装飾）などが見つかっている。

歴史時代は、陳内庵寺、陳内窑跡・球磨駅家跡や、中世の隈庄城跡などがある。（豊崎）

注①「九州縄文土器の研究」小林久雄 小林久雄先生遺稿刊行会 1967

②「阿高貝塚」城南町文化財報告書 城南町教育委員会 1978

③「城南町史」 城南町 1965

④「木原聖祐地帯における巨石調査報告」小林誠也 熊本史学 1958

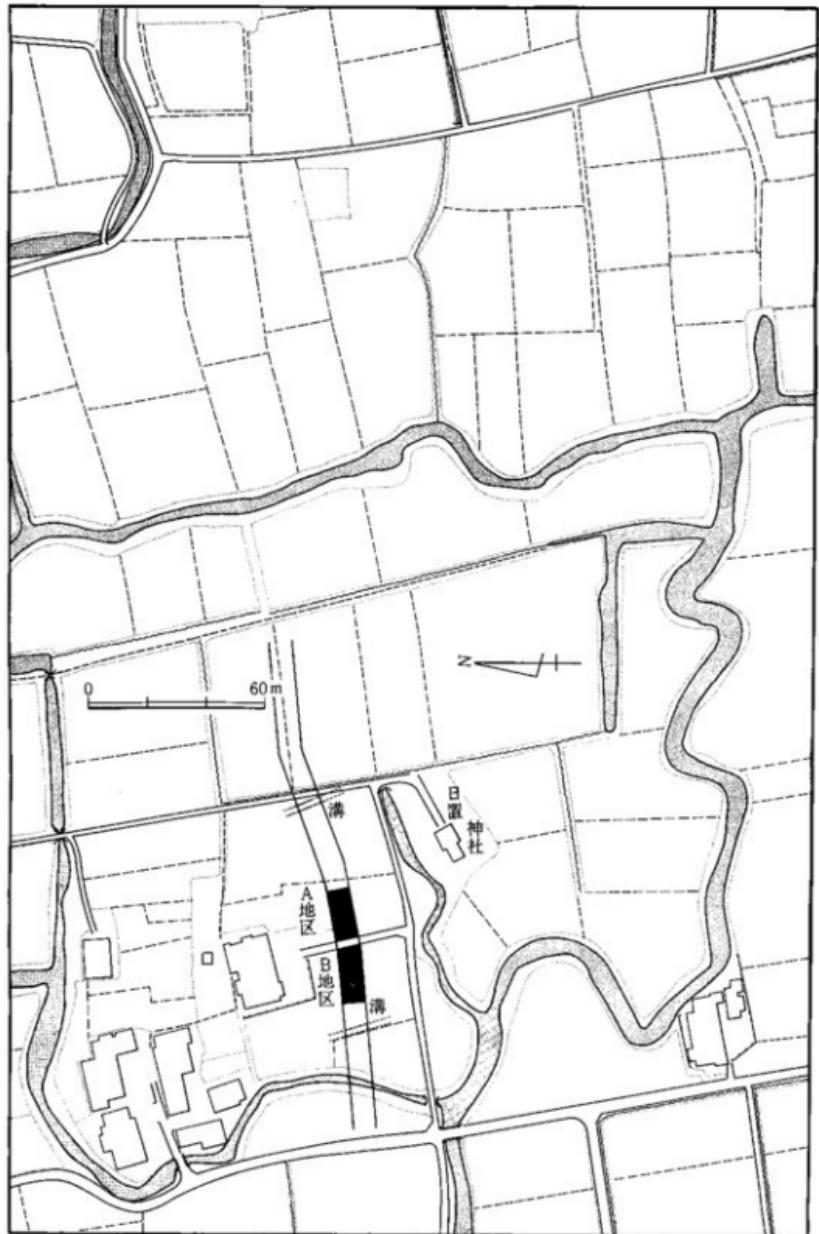
周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時期	備考	番号	遺跡名	時期	備考
1	沈目遺跡	縄文早期	散布地	24	東阿高横穴群	古墳	横穴 (7)
2	阿高貝塚	縄文中期	貝塚 (2)	25	尾窪横穴群	古墳	横穴
3	黒崎貝塚	縄文中・後期	貝塚 (3)	26	城ノ鼻横穴群	古墳	横穴 (5)
4	御領貝塚	縄文後期	貝塚 (1)	27	塚原上原遺跡	弥生・古墳	住居址・円墳
5	敷田貝塚	縄文晚期	貝塚	28	舞ノ原遺跡	縄文・弥生・古墳	散布地
6	今村貝塚	縄文晚期	貝塚	29	弘塚遺跡	弥生・古墳	散布地
7	團貝塚	弥生	貝塚 (4)	30	近道遺跡	弥生	散布地
8	中尾貝塚	弥生	貝塚 未調査 (6)	31	宮ノ前遺跡	縄文・弥生・古墳	散布地
9	丹生宮河底遺跡	弥生	散布地 (9)	32	志導寺遺跡	縄文早期	散布地
10	赤見前田遺跡	弥生・古墳	散布地 (7)	33	宮ノ原遺跡	縄文後・晚期	散布地
11	永遺跡	弥生	散布地	34	吉野山周辺古墳群	古墳	
12	碇遺跡	弥生	散布地 (8)	35	弘塚古墳	古墳	前方後円墳
13	西天神原遺跡	弥生・古墳	散布地	36	甚九郎山古墳	古墳	前方後円墳
14	東天神原遺跡	弥生・古墳	散布地	37	山ノ神遺跡	奈良・平安	礪骨器
15	杉上メド町遺跡	古墳	散布地	38	三石野遺跡	縄文後・晚期	散布地
16	紙園寺遺跡	弥生	散布地 (8)	39	益城軍団推定地	奈良・平安	
17	一丁畠遺跡	弥生	散布地 (9)	40	益城国府推定地	奈良・平安	
18	新御堂遺跡	弥生	散布地 (9)	41	陳内廐寺跡	奈良・平安	礪石
19	構口遺跡	弥生	散布地 (9)	42	陳内廐跡	奈良・平安	廐跡
20	宮本遺跡	弥生	散布地 (9)	43	野田廐跡		廐跡
21	向権現遺跡	弥生	散布地	44	東龜島瓦窯跡		窯跡
22	迎原遺跡	弥生・古墳	散布地	45	隈庄城跡	中世	中世城跡 (9)
23	塚原古墳群	古墳	円墳・前方後円墳など	46	球磨駅家跡		駅跡 (9)

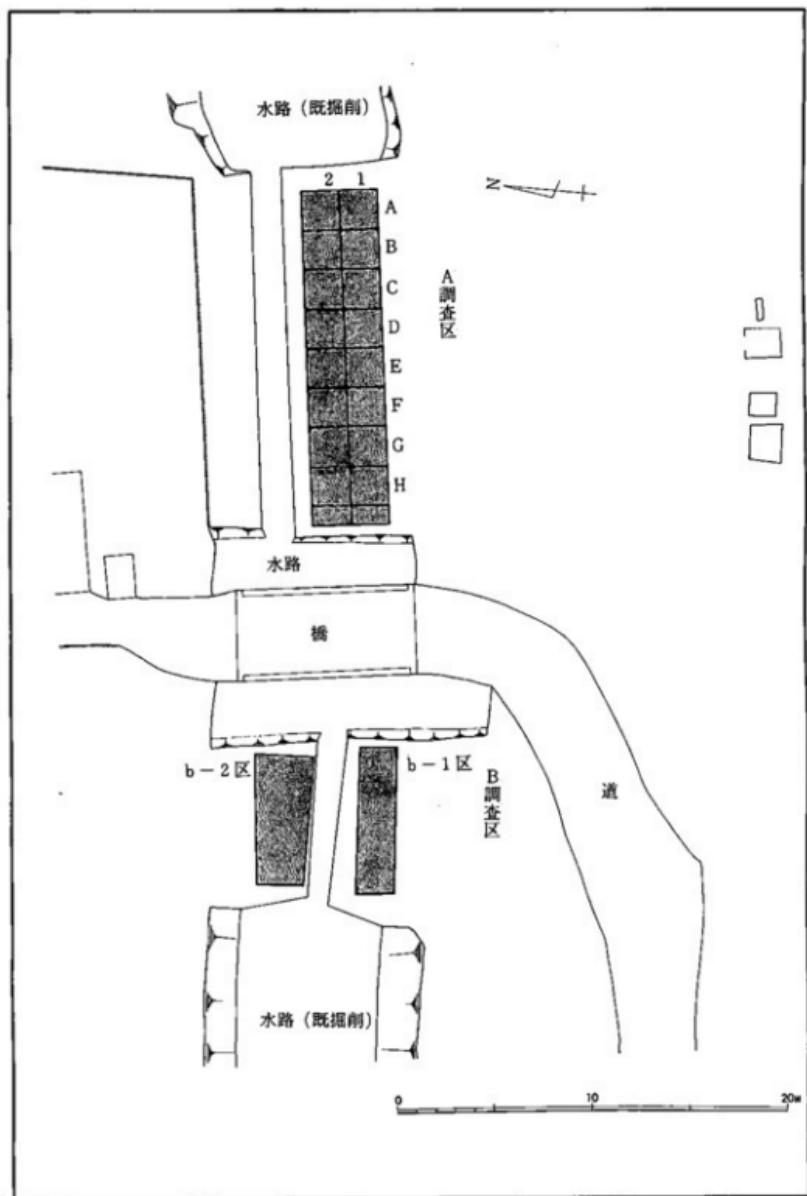
&lt;備考&gt; 地図の遺跡番号は備考欄の( )と対照

## 2. 調査経過

- 昭和54年 11月14日 調査地の現状を知るため踏査する。調査区設定。その他諸準備。
- 11月15日 調査器材準備と作業員の確保を終る。発掘調査の最終打ち合せ。
- 11月17日 A・B地区の表土剥ぎを行い、作業を開始する。A地区、I層より土師器の破片や青・白磁片などを検出する。作業員5名
- 11月18日 A地区にグリッドを設定する。E-1区を断面観察の為、泥土まで掘り下げ、土層を確認する。
- 11月19日 陶器、石製品などの遺物が出土。
- 11月20日 宇土市教育委員会、平山、高木、木下氏の指導助言を得る。泥土（IV層）までの土層はすべて水田耕作土の重層であると考えられる。遺物は二次的な流れ込みが多く、プライマリーな遺物包含層である可能性は弱い。
- 11月21日 調査区が水路予定地の為、湧水量が多く、午前中は排水作業におわれて作業が出来ず。五輪塔片がIII層より数個出土する。
- 11月25日 A地区、土層確認、実測。作業員10名。
- 11月26日 A地区の作業を一応打ち切り、B地区の調査を開始する。b-1、b-2区I層を掘り下げ、ピット状造構を確認する。午後B地区中央部の排水路拡張作業中、完形に近い高壙2個を検出した。
- 11月27日 B地区 b-2区、ピット状造構掘り下げ。
- 11月29日 B地区 b-2、II層上面の遺構、遺物の実測、撮影。
- 12月1日 B地区 b-1、II層上面の遺構、遺物の実測、撮影。
- 12月2日 B地区 b-2、III層まで掘り下げ溝状造構とピット状造構を確認する。遺物包含の関係から、上面と下面に分けて遺物を取りあげる。
- 12月3日 B地区 b-1、III層まで掘り下げ、II層で確認した遺構（p-4）はIII層まで続く事を確認する。
- 12月4日 県文化課・浦田調査員の協力を得て、調査区付近の平板測量を行う。b-1、III層上面で検出した遺構の実測、撮影を行う。
- 12月5日 城南町教育委員会、山田教育長、友口課長、樹永係長、豊田指導主事、森主事の視察を受ける。b-2区東側の高壙出土地点の周辺を掘り下げ、多数の遺物を検出する。b-1区、b-2区III層の中位まで掘り下げ、遺構、遺物の確認を行ったが、検出できなかった。
- 12月6日 B地区、b-1区、b-2区の断面実測、調査区発掘終了時の写真撮影をすませ、全調査の日程を終了した。（豊崎）



第2図 調査区地形図



第3図 トレンチ設定図

### 3. 試掘溝の設定（第3図）

調査は水路予定地内、約200m<sup>2</sup>の面積を行った。橋をはさんで東側をA地区、西側をB地区とした。

A地区は南北に4m、東西に17mのグリッドを設定し、南側から北側に向かって1・2、東側から西側にA・B～Hと記号を付し、1辺2mの方眼を組み、それぞれA-1区・H-1区などと呼称した。A地区は中を通る排水溝の断面に表土下20cm程度のところに多数の土師器片などが確認されることや、以前に現在の耕作面より50cmぐらい高い畑地であったのを、水田面に下げるとき、五輪塔片が出土していることなどから、遺構、遺物が残っている可能性もあると思われた。そのため何らかの遺構が確認された場合、調査区の拡張も予想された。

B地区はA地区と同様畑地であったが、一部農道も含まれている。調査区のほぼ中央に水路があり、便宜上南側をB地区b-1区、北側をB地区b-2区と呼んだ。調査区の土層はそれぞれ、それ以前に掘られた付近の水路断面に観察することができた。それによると表土下1m程度で青灰色の粘土（泥土）があり、遺物が出土する層は表土下50cmぐらいの所で、その下は白色の粘性をもつ土層、そして青灰色の泥土と続く。そのため発掘の最終掘り下げ面は泥土までとした。B地区も遺構、遺物の広がりによっては、試掘溝の拡張も予想された。

B地区の大きさは、b-1区が東西に7.5m、南北に2m、b-2区は東西に7.5m、南北に約3mである。（豊崎）

### 4. 調査結果

今回の調査により、次のような結果を得た。

- ①B地区より古墳期（6世紀中葉～後半）と思われる遺構・遺物包含層を確認した。
- ②弥生時代・古墳時代・歴史時代の遺物が出土した。
- ③海拔2m程度の高さより古墳期の遺物が検出された。
- ④V字状の溝状遺構を確認した。

⑤遺構・遺物が検出された場所は水田の中の微高地になっている所で、付近の微高地にも遺構の存在が考えられる。

以上のことから、赤見前田遺跡は古墳期の遺物包含層をもち、この付近一帯は水田下に弥生・古墳期の遺跡が存在する可能性が強くなった。事実、付近の丹生宮川床遺跡などの例もある。

日置神社付近からは多くの青・白磁片や土師器の糸切り皿などの遺物が採集されているが、分布範囲は神社を中心に半径300m程度だった。以上の分布状況および字名の寺村・前田などから、中世に存在したと思われる金福寺の寺域もある程度比定することができる。

なお、水路断面に幅約2m、深さ約2.5m、溝底約1mの溝状遺構が確認され、その底部は泥土に達している。溝は対岸の水路の両側断面に観察されて、それにより方向がある程度推定できる。

時期は、溝の中位に土師器片を含んでいるが、浮いた状態であるため、同時期のものか判断しがたい。性格も、赤見の中世に発生したと思われる環濠集落の水路跡であるのか、条里制の遺構であるのか不明である。ただ参考ながら熊本県文化財報告書第25集、「熊本県の条里」(1977)によると、坪界の方向と線がほぼ一致する。

### (1) 土層

A・B地区はまったく異った土層をもつ。A地区は水田土層が三層に重なりその下は泥土になる。遺物は出土状態から、すべて二次堆積で、耕作による擾乱を受けている。B地区は明確なる遺物包含層があった。B地区b-1、b-2区は、ほぼ同様な堆積であるが、多少変化がある。層序が一定でないのはA地区も同じであるが、そこでA・B地区的標準的土層を記す。

#### A地区

I層 灰褐色土層 上面は耕作により、いくらかやわらかく、下はいくぶん硬い。斑鉄が膜状に散在する。若干の砂質を含み、厚さ30cm内外を測る。遺物は弥生式土器片や、須恵器・土師器の破片、中世～近世の遺物を出土する。

II層 灰黄褐色土層 中・細円碟を含む。I層に比べ粘性が強い。斑鉄が膜状に散在する。遺物はI層と同様のものを検出し、その他五輪塔片を数個出土した。厚さ40cm程を測るが、断面観察により、厚さは調査区の中心部(E-1南側)や、北側(H-2東側)がいくぶんうすくなっている。

III層 暗黄褐色土層 中・細円碟を含む。他の層にくらべ(A地区的土層)、粘性に富み硬い。斑鉄が膜および管状に散在する。遺物の出土量はいくぶん少なくなる。五輪塔片・宝鏡印塔片が集中的(E-2・F-2)に出土する。厚さは場所により少し変るが20cm内外を測る。

IV層 青灰色粘土層(泥土) 斑鉄が軍管状に散在する。陶質土器片、桃の種子・流木・五輪塔(火輪)・宝鏡印塔片(宝珠)などを検出する。

#### B地区

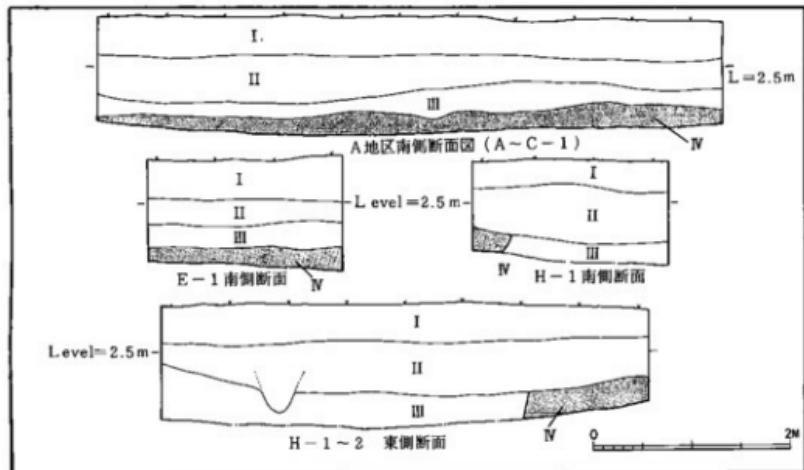
I層 暗灰色土層 耕作土。砂質で小・中円碟を含む。厚さ15cm内外を測る。II層へのピット状遺構内の堆積土層はI-2～6と呼称した。又b-1区、南側の断面に観察できるI-1層は元はII層の上面にくるものと思われる。

II層 褐色土層 砂質を含む。古墳期の遺物を多量に検出するほか、弥生式土器も数片出土している。厚さ40cm程度を測る。

III層 白色粘性土層 粘性に富み硬い。斑鉄が膜および管状に散在する。灰白色結核をもつ。遺物は少ないがb-2区東側より集中的に、完形の高壙や甕などの遺物を出土した。

厚さは調査区では実測できないが、付近の水路の断面観察により70~80cmと思われる。  
**IV層** 青灰色粘土層 B地区内では水没しているため、確認はできないが、付近の断面より観察して、おそらく**III層**の下にくるものと思われる。遺物・遺構はないものと考えられる。  
 以上は標準的土層の概略であるが、詳細な説明は遺構の項で述べる。その他、試掘坑などの実測図も参照してもらいたい。

なお、A・B調査区では前にも述べたが、A・B区異なる土層（IV層は同じ）であり、土層の呼称は同じであっても、時期・性格はちがう。



第4図 A地区土層断面図

## (2) 遺構・遺物出土状態

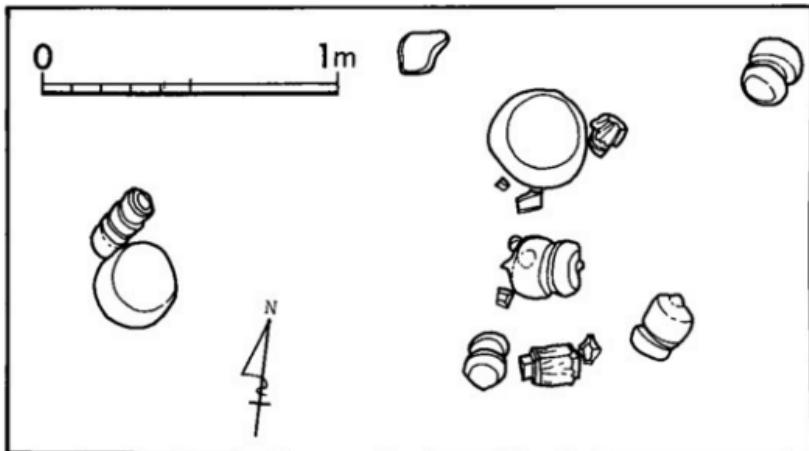
### A地区 (第4・5図)

調査区東側に、東西に17m、南北に4mの調査区を設定する。断面実測は、A-1、B-1、C-1、D-1、E-1、H-1の南側とH-1、H-2の東側を行った。層位は4層を確認する。遺構は見つからなかった。

- I 灰褐色土層 斑鉄が膜状に散在する。砂質を含む。
- II 灰黄褐色土層 中・細円礫を含む。
- III 暗黄褐色土層 中・細円礫を含む。粘性に富み硬い。
- IV 青灰色粘土層 斑鉄が管状に散在する。

IV層まで掘り下げるが、明確な遺構、包含層はなかった。出土遺物は弥生式土器片、古墳期の土器、中世～近世の遺物がI～III層より出土している。五輪塔片はA-2、D-2、E-2のIII層、IV層から集中して出土した。

五輪塔は空輪4個、水輪2個で、宝篋印塔は宝珠片などである



第5図 A地区遺物出土状態

B地区

b-1区（第6図）

B地区南側に東西に7.5m、南北に2mの試掘溝を設定する。表土下80cm程掘り下げる。土層は3層まで確認する。ピット状遺構は4ヵ所を検出する。

I 暗灰色土層 耕作土、小石を含む。

I-1 灰白色土層 斑鉄が膜状に散在する。田床の一部と考えられる。ピットはこの層より掘り込まれたものと思われる。

I-2 黒灰色土層 腐葉土を含む、中世～近世の時期と思われる。古墳期の土器片と礫を出土する。

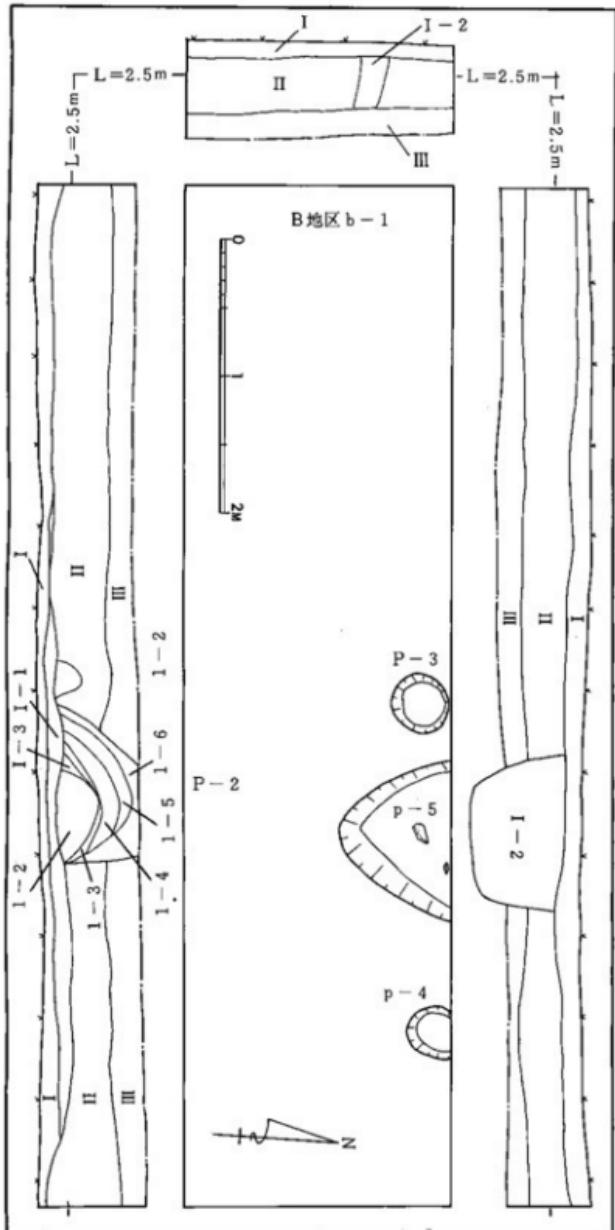
I-3、I-4、I-5、I-6 灰褐色土層。I-2～6まで遺構内堆積土で、土層はI-2を除いてすべて灰による4枚の互層である。

II 褐色土層 古墳期の遺構、遺物、礫を包含する。硬く締まりをもつこの層の上面で遺構確認を行った。

III 白色粘性土層 粘性に富み硬く締まりをもつ。

IV III層の下のIV層(青灰色粘土・泥土)まで掘り下げる予定だったが、調査区が水路予定地であるために湧水が多く実測不能であった。一応III層の中位まで調査を行った。水路断面観察では、IV層はIII層下面より20cm程下であった。

出土遺物は上層より、弥生式土器片、須恵器、土師質の糸切底皿、青白磁片などが検出されている。II層からは、弥生式土器底部片、古墳期の土器(壺、高壺、瓶、壺、壺など)が出土した。III層上面より、土師器片がわずかに出土したが、明確な遺構、遺物の検出はなかった。



第6図 B地区 b-1 遺構・断面実測図

I-1は他の断面には見られないが、おそらくII層の上にくるもので、他の面ではI-1層は削除されたものと思われる。ピット状遺構群の時期は伴出土器により古墳期のものと考えられる。

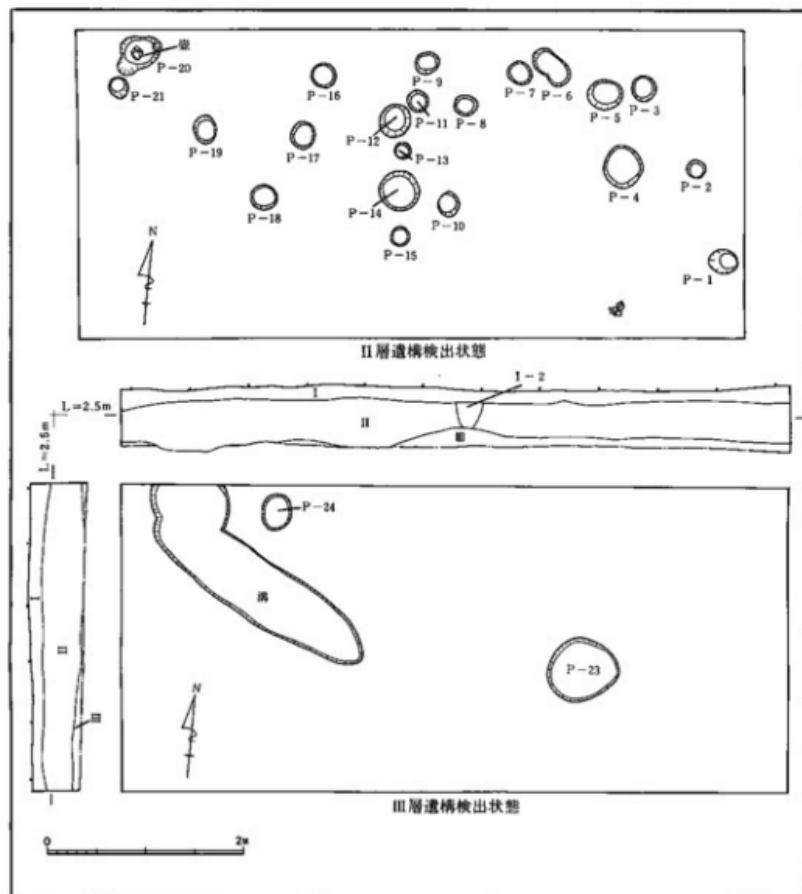
遺構は、I-1層より掘り込まれたと思われる。ピット状遺構が4カ所確認された。P-1は南側の断面観察により遺構を確認したため、平面での遺構の広がりは不明である。P-1は他の遺構から推定して同時期のものと思われる。ただ他の遺構内からは、カーボンは検出されていない。遺構内の堆積状況から考えて、遺構は2つのピットが重なったものと思われる。

P-2、P-3は柱穴状に掘り込んである。P-2、P-3は同様に検出した

b-2のピット群に関連したものと思われる。P-4は他のピット群に比べ規模が大きく深い。形状も角状を呈し壁面も急である。遺構内よりこぶし大の石と古墳期の遺物を検出する。それぞれの大きさは、P-1が径110m、深さ50cmを測る。P-2は40×45cm、深さ30cmを測る。P-3は43×41m、深さ28cmを測る。P-4は検出部分で、幅109cm、長さ84cm、深さ69cmを測る。

#### b-2区(第7図)

B地区北側に東西6.5m、南北3mの試掘溝を設定する。表土下60cm程掘り下げる。ただし遺物が集中して出土した南側はⅢ層から50cm程掘り下げた。土層は3層まで確認する。II層上面よりピット状遺構群を、Ⅲ層上面でピット状遺構と溝状遺構を検出した。土層はb-1とは



第7図 B地区 b-2 遺構実測図

は同じ堆積をもつ。

I 暗灰色土層 耕作土、上面はややソフト、下面是やや締まる。

I-1 黒灰色土層 腐葉土を含む、II層に掘り込まれた堆積土。

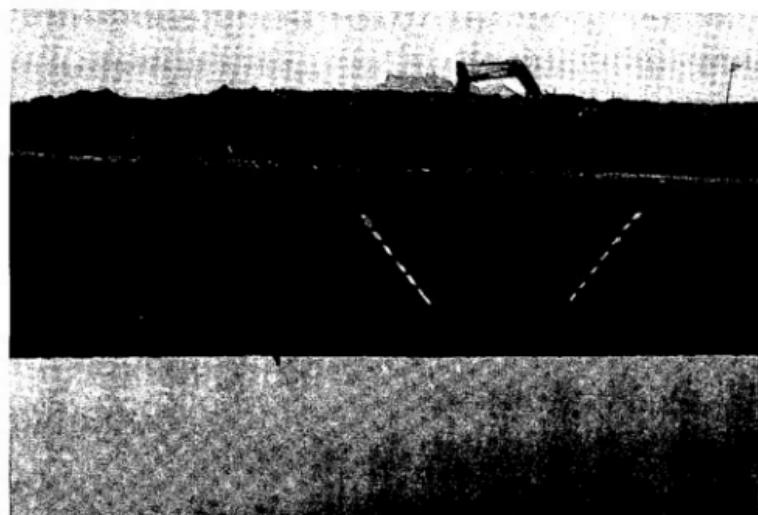
II 褐色土層 硬く粘性の強い古墳期の遺物包含層である。

III 白色粘性土層 斑鉄が膜状に散在する。粘性に富み締まりを持つ。

遺構は、II層上面から掘り込まれたピット状遺構群を検出した。ピットは、ほぼ正円で合計21個を数え、並びには一定の規則性があるように観察された。検出されたピットの大きさから、径40cm内外と、径20cm内外の二つのタイプに大別される。ピット内の堆積は、断面観察によりI-2層だと思われる。すべての遺構より古墳期の遺物が伴出された。特にP-14からは15~20cmの円碟が、又P-20からは10cm程の蝶とともに完形に近い壺（第9図12）が出土した。

III層で確認した遺構は、II層から掘り込まれたものと思われる。溝状遺構とピット状遺構2個が検出された。溝の形は皿状で凹み、溝底は平坦である。又、わずかだが、東側が浅く、西側が深い。溝より土師器小片が検出された。深さは10~20cm程度を測る。

III層下部より完形に近い高壺4個をはじめ、壺、變形土器が集中して検出された。土器の面的な広がりは、b-2区の東側に集中していた。出土した層はIII層であるが、検出状態から泥土（IV層、青灰色粘土層）とIII層付近と考えられる。しかし、土器出土面は、標高2m内外の水面下であったため、出土した土層の確認は不明瞭であった。土器群の出土状況から推察して、径1m前後、深さ20~30cmの大きさの遺構であったと考える。参考として、付近の水路断面にIII層上面から幅50cm、深さ30cm程度のU字形遺構を3ヵ所確認したことと付記する。



調査区西側 水路南側 V字状溝

### (3) 遺物

今回の調査により出土した遺物は、弥生時代・古墳時代・歴史時代に大別される。いずれもB地区出土のものが多い。ただし、五輪塔片はすべてA地区出土のものである。以下おもな出土遺物について述べる。

#### ① 弥生式土器（第8図 1～4）

1は表採資料である。口縁部から胴部にかけての破片で、口径31.8cm、くびれ部26.1cmを測る。口縁部は複合口縁で肩部以下に刷毛目調整がみられる。口縁部から頸部にかけての内面および外面には刷毛目又は刷毛目なで消しを横にした調整痕をもつ。口縁端部は丸く調整され、口縁端部はわずかに外反する。複合口縁端部下部に刻目がみとめられる。色調は淡黄色で、胎土に細砂粒を含む。焼成は良好である。

2は赤見の伊津野金彦氏の提供された、付近より表採した資料である。口縁部から頸部にかけての破片で、頸部の突帯に刻目をもつ。口径18.5cm、くびれ部11.3cmを測る。口唇部はわずかにくぼみをもち、口縁部はラッパ状に開く。内外面は丁寧なヨコナデが施されている。色調は黄褐色で、胎土に砂粒子を含み、焼成は良好である。

3は免田式（重弧文）土器の破片と思われる。この種の土器は城南町での出土例は多く、平野天神原・宮地一丁目・前無田の東部などから発見されている。特に平野の天神原からは住居址に伴い検出されている。<sup>註10</sup> 今回出土した土器は、円筒形の頸部と胴部付近の破片で、腹部の上半に平行に沈線を多数めぐらしている。下半部は重弧文を並列して、断面はソロバン玉形を呈すると思われる。調整は胴部より上は外面を刷毛目調整している。内面の頸部・胴部の屈折部には、指圧の圧痕が見られる。色調はうすい黄褐色で、胎土はごくこまかな砂粒子を含み、焼成は良である。A地区E-1 III層出土。

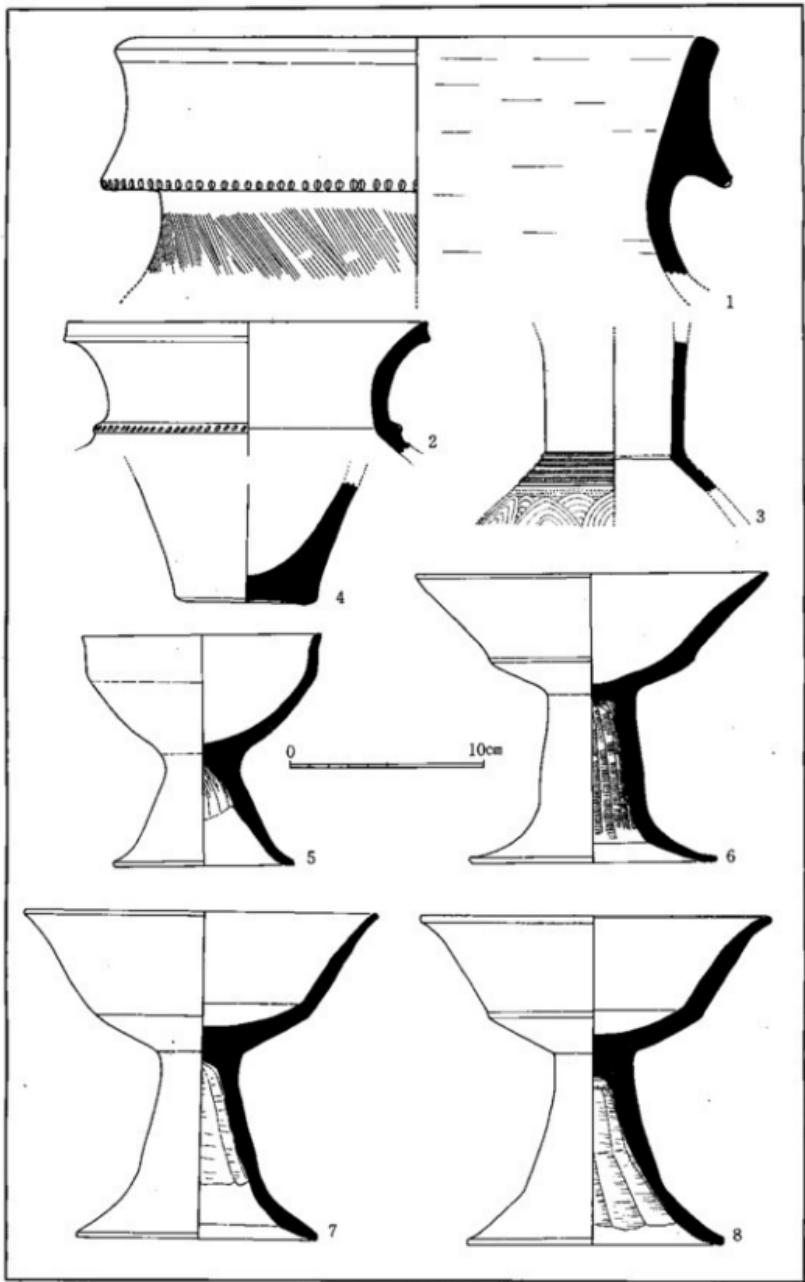
4は甕の底部の破片である。底部径7.1cmを測る。底はややくぼみ、少し広がったような曲線を描き胴部へ移行する。平底で内外面に撫でを施している。胎土に石英粒子を含み、色調は赤褐色で、焼成は良である。b-1区II層出土。

その他、弥生式土器として胴部の突帯に刻目をつけた土器片などが數片見つかっているが、小片のため実測不可能である。出土事実だけの報告にとどめる。

#### ② 土師器・高坏（第8図 5～8）

5は坏部径12.2cm、底部径9.1cm、坏部高5.5cm、器高11.6cmを測る。ほぼ完形である。坏部の形は塊状を呈する。丸底から口縁部にかけて内湾気味に脹り、口縁部付近でわずかに立ちあがり、口縁端部は外反する。脚柱部はわずかに張り、底は大きく開く。坏部内面と外面の器面調整は横撫でで、脚筒部内面の上面は横に箒状工具により削りを施している。色調は明赤褐色で、焼成は良である。胎土に黒曜石の小片が混入している。

6は、坏部口径18.0cm、底部径12.7cm、坏部高5.1cm、器高14.6cmを測る。ほぼ完形である。



第8図 出土遺物実測図

坏部の中心部がやくほみ横に開く、坏上半部と下半部の接合部と思われるところの段にうすい稜を残す。脚柱部はわずかに張り、底は大きく開く。口縁端部はわずかに外反し丸くおさまる。内外面とも横撫でで調整されている。脚の筒部内面は横方向の箆状工具による削りを施している。色調は赤褐色で、胎土に砂粒を含む。焼成は良である。

7は坏部口径18.1cm、底部径12.4cm、坏部高7.1cm、器高16.6cmを測る。ほぼ完形である。坏部は横に開き、坏上半部と下半部の接合部と思われる段にうすい稜を二条残す。脚柱部はわずかに張り、底部へ移行する接合部で肥厚になる。口縁部は外反し端部は丸くおさまる。坏部内外面脚部外面とも横撫で調整で、脚部内面は横に箆状工具により削りを施す。色調は赤褐色で、焼成は良、胎土に砂粒子を含む。

8は坏部口径17.9cm、底部径13.0cm、坏部高6.3cm、器高16.8cmを測る。ほぼ完形の土器である。坏部は横に開き、坏上半部と下半部の接合部と思われるところに段を有する。脚柱部はまん中よりやや下で開き、端部にうつる。口縁端部は外反し丸くおさまる。内外面とも横撫で、脚の筒部内面は横方向の箆状工具による削りを施している。色調は赤褐色で、胎土に砂粒子を含み、焼成は良である。5～8はB地区b-2Ⅲ層より出土。

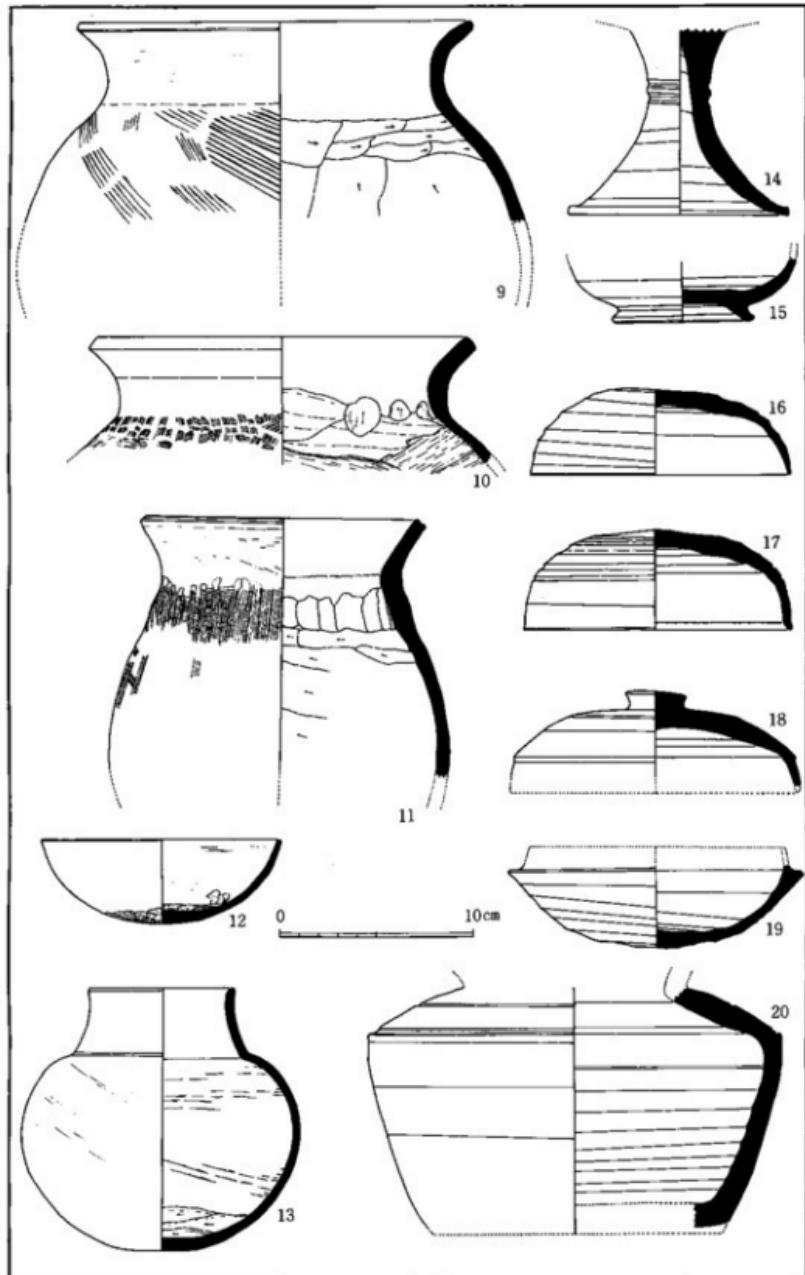
### ③土師器・甕（第9図 9～11、第10図 21）

9は口縁部から胴部にかけての破片である。口径20.4cm、頸部17.4cmを測る。口縁部は「く」字形に外反し、口縁端部は丸くなる。頸部から肩部にかけてわずかに脹みをもち胴部は丸く球形に脹ると思われる。口縁端部に稜を残す。器面調整は口縁部内外面とも横撫でを施し、頸部から胴部にかけて左斜位に刷毛目調整をしている。胴部内面は、上面を箆状工具で横に細かな削りを施し、下面是縱方向に削ってある。胎土に砂粒を含み、色調は黒褐色で焼成は良である。甕はすべてB地区b-2Ⅲ層よりの出土である。

10は、口縁部から頸部にかけての破片である。口径20.3cm、頸部17.4cmを測る。口縁部は「く」字形に外反し、頸部から球状に胴部に移行すると思われる。調整は口縁部は横撫でを施し、頸部から胴部にかけての外面は、細かな刷毛目を施している。内面の上位は縱方向に、下位は横方向に削りを施す。黒褐色で、焼成は良である。砂粒子を含む。

11は、口縁部から胴部にかけての破片である。口径15.1cm、くびれ部12.5cm、最大胴部径17.2cmを測る。器形は口縁部が「く」の字状に外反し、胴部は締った円形をなす。口縁端部は凹状になっている。調整は口縁部の内外面は、横撫でを施し、頸部付近の外面は刷毛目を横撫での後、細い刷毛目を縱位に施してある。頸部から胴部にかけての内面は、箆状工具により中位から上位にかけて横方向に、上位は縱に削ってある。色調はうすい黒褐色を呈し、胎土は砂粒子を含み、焼成は良である。

21は、底部を欠いている。口径20.4cm、くびれ部17.1cm。胴部最大幅25.6cmを測る。器形は、口縁端部は丸く、口縁部から頸部にかけてはゆるやかな「く」の字形を描き、胴部は縱長の



第9図 出土遺物実測図

円形で底部は丸底になると思われる。器面調整は口縁部は横撫でを施し、胴部外面は刷毛目調整を行っている。内面は下位から中位にかけては上方へ、中位から上位にかけては横方向に、籠状工具による削りを残す。色調は黒褐色で、胎土に小石（2mm程）と砂粒を含む。焼成は良好である。

④土師器・壺（第9図 12）

12は、b-2区のII層より出土した壺の破片である。復原で口径12.3cm、器高4.3cmを測る。器形は壺状を呈し、口縁部は丸くおさまる。底部と胴部との接合部と思われるところは、いくぶん器肉がうすい。調整は口縁部から胴部にかけては横撫でで、底部内外面は籠状工具により横に削っている。色調は灰白色で、胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。b-2区II層出土。

⑤壺（第9図 13）

13は、口径7.7cm、胴部最大幅14.7cm、器高13.4cmを測る。器形は口縁部は内湾して立ちあがり、端部はわずかに外反し丸くおさまる。胴部は円形にふくらみ、底部はわずかに平坦面をもつ丸底である。調整は内外とも刷毛目状工具による丁寧な横撫でを施し、底部内面は籠状工具による削りがわずかに残る。色調はうすい黄土色で、胎土に砂粒子を含み、焼成は良好である。B地区b-2のII層のピット（P-20）の中より出土した。

⑥須恵器（第9図 14~20）

須恵器は、高壺・高台付壺・壺・壺蓋・壺などが出土している。14・15は表採資料で、16~19はB地区b-2区のIII層からの出土である。

●高壺

14は、壺部を欠いた高壺の脚部破片である。形状はゆるやかなカーブを描きながら、壺部に至る。筒部に二条の凹線を施す。調整は内外面とも横撫でを施している。色調は灰白色で、胎土に微砂粒を含む。焼成は良好である。

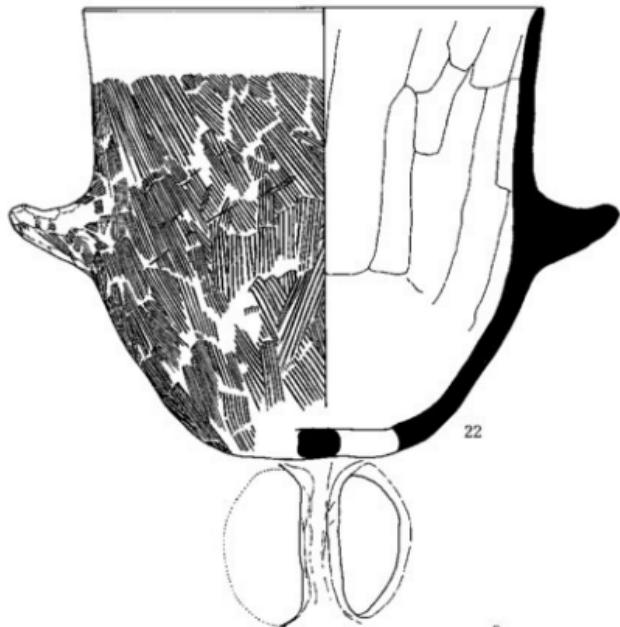
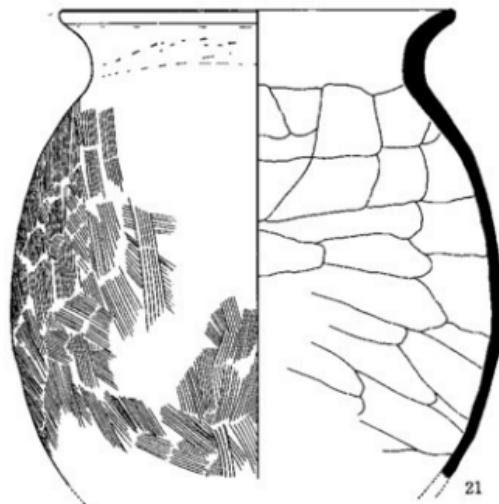
●高台付壺

15は、体部と高台の破片である。形状は、ゆるやかに立ちあがり、底部はわずかに平らになつていて、高台は張り付けによるものでハの字状になり、端部は丸くなる。調整は内外面とも籠切りの後、横撫でを施し、底部は籠切りである。色調は灰色で、胎土に砂粒子を含み、焼成は良好である。

●壺（16~19）

16・17は壺蓋である。形態は天井部が高く、器形全体が丸みをもつ。16は肩部付近に二条の凹線を施し、内面に弱い段を有している。天井部外面の調整は回転籠削りを施している。色調は灰色で一部（17）に白色の自然釉が付着する。胎土はわずかに砂粒を含み、焼成は良好である。

18はツマミを有し、口縁端部を欠する壺蓋である。口縁部に段をもつ。天井部内外面の調



0 10cm

第10図 出土遺物実測図

整は範削りを施している。色調は灰白色で、胎土に砂粒を含み、焼成は良である。

19は口縁端部を欠ける蓋坏（身）である。推定で口径11.9cm、器高5.0cmを測る。底部外面の調整は範削りで、体部から底部へ丸みをもって続き、いくぶん高くなる。色調は外面は灰白色で、内面は灰色である。胎土は砂粒を含み、焼成は良好である。

#### ●壺

20は表採資料である。形態は推定で、肩部最大幅21.2cm、底部15.1cmを図る。口縁部と頸部との接合面を、意識的に磨滅させている。形状は肩部が張り、胴部との境は屈曲している。頸部から肩部にかけて二条の凹線が横方向に走っている。屈曲部付近の上面に走る凹線は2本観察される。底部は平底と思われる。調整は範状工具で内外面を削ったあと横挫で施している。色調は濃い灰色で、胎土に2cm程度の小石と砂粒を含み、焼成は良好である。蔵骨器として使用された可能性もある。

蔵骨器は城南町周辺で、数ヶ所の出土地がある。出土地は、富合町字宮山、城南町阿高字東原、阿高一ノ字山頂、塚原日焼塚、塚原火葬場古墳付近、尾窪・鰐瀬山ノ神・吉野山南斜面、<sup>井戸</sup>陳内舞ノ原・平野天神原・沈目などが上げられる。しかしいずれも丘陵部であって、もし蔵骨器ならば水田面よりの出土は、今回が初めと思われる。

#### ⑦土師器・瓶（第10図・22、第11図・23）

22は口径23.8cm、底部径8.9cm、器高23.2cmを測る。形状は口縁部はわずかに外反し、胴部は底部から内湾しながら立ちあがる。底部の中央にブリッジに面し、二孔を設ける。調整は外面を口唇部下3cmぐらいから縦位に櫛目を施し、内面は範状工具で下から上へ削っている。色調は赤褐色で、胎土に小石を含み、焼成は良である。

23は口径23.2cm、底部径6.2cm、器高22.3cmを測る。把手を欠いている。口縁部は外反し丸くおさまる。胴部は底部へ内湾し移行する。

外面は縦位に刷毛目調整を行い、内面は範状工具により斜位に削りを施している。色調うすい赤褐色で、胎土に砂粒を含み、焼成は良である。いずれもB地区b-2Ⅲ層より出土。

#### ⑧鉄製品（第11図 24）

24は先端部を欠損する笄で、推定で全長11.0cm、刃部幅4.2cmを測る。表採資料。

#### ⑨布目瓦（第11図 25・26）

25は右側面を含む平瓦の破片である。凸面は繩目の叩き、凹面は麻布の圧痕が残る。26も同じく平瓦の破片で凸面に格子目叩きを施し、凹面は全面に布痕が見られる。遺物は他からの持ち込みも考えられる。A地区I層出土。

#### ⑩青・白磁（第12図 27~30）

27・28・29は青磁片である。いずれも青磁蓮弁文碗の底部（28・29）、口縁部（27）の破片で、胎土は灰白色を呈する。いずれも表採資料である。30は白磁片である。水路断面（I層）

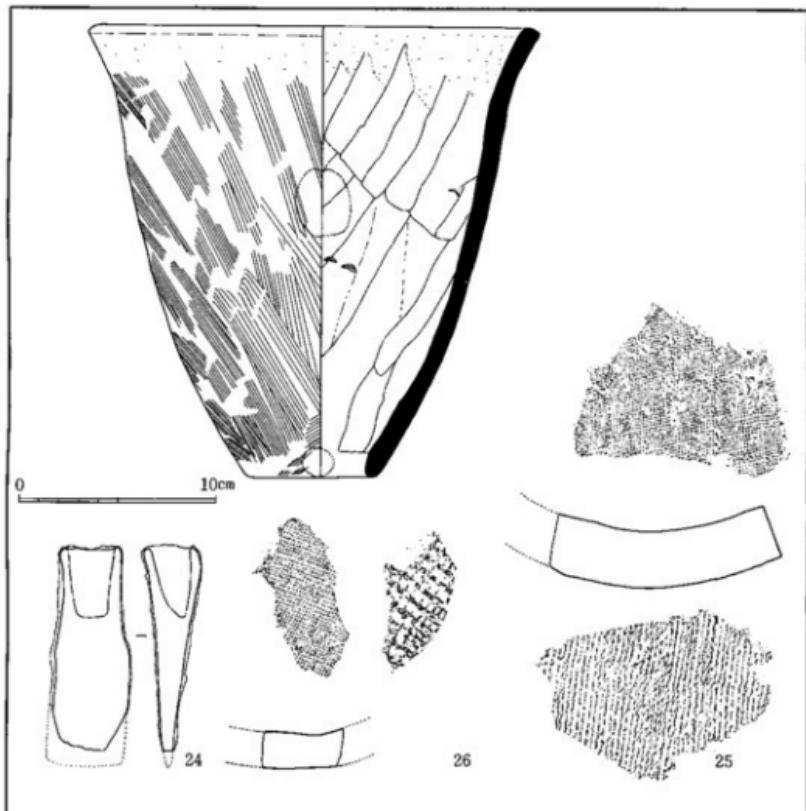
より出土した。採集時には破損していたが、出土状態からおそらく完形だったと思われる。口径15.11cm、底部径6.01cm、器高6.8cmを測る。口縁部が折りかえされ、肥厚した断面三角形の塊形をなす。底部は窓により削り出しをおこなっている。胎土は灰白色を呈する。

赤見・金福寺社の付近から南宋の青・白磁片、高麗の青磁片が以前出土したものとほぼ同時期のものである。

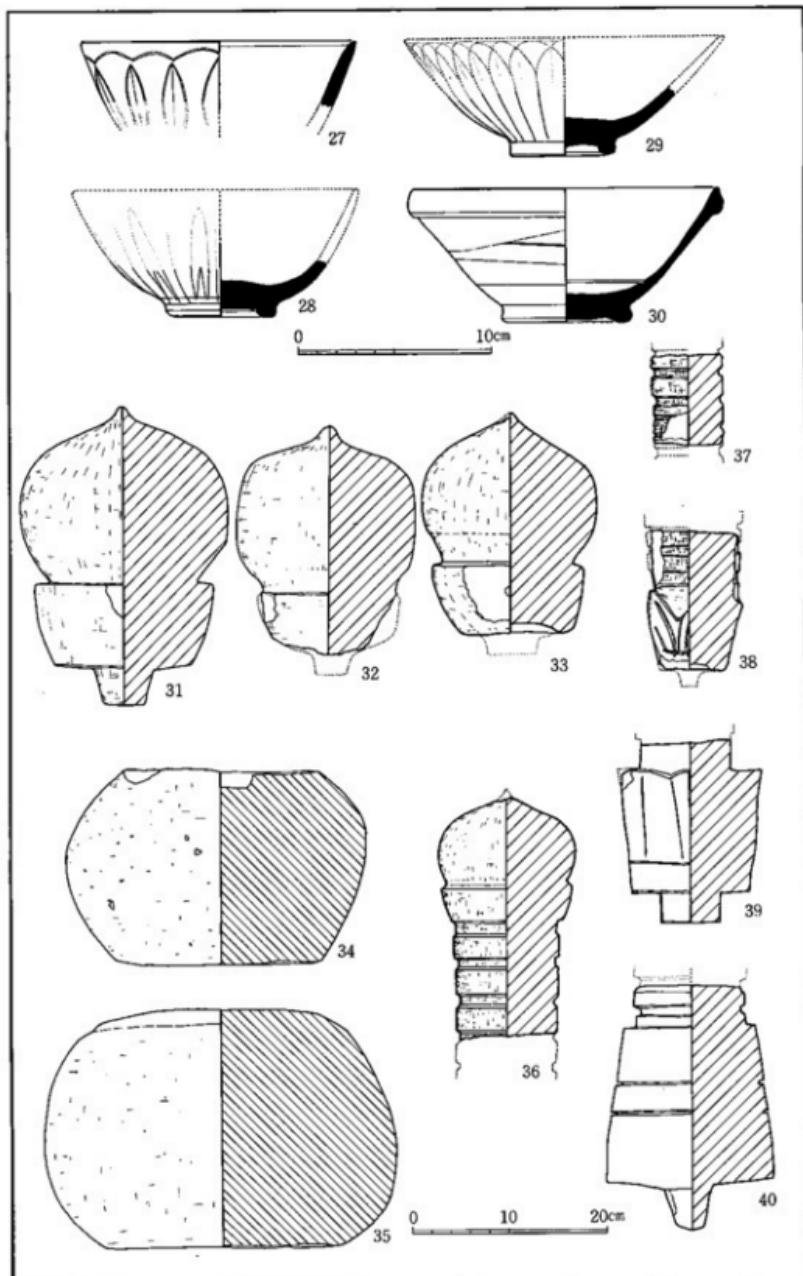
⑪五輪塔・宝慶印塔（第12図 31～40）

31～33は五輪塔の空風輪である。大きさは若干ちがうが形状は類似する。材質は、軽石を含む溶結凝灰岩で作られている。31は最大幅30.2cm、高さ21.2cmを測る。32は最大幅18.4cm、高さ23.3cmを測る。33は最大幅18.0cm、高さ22.2cmを測る。形態はいずれも先端が宝珠状になっている。

34・35は水輪である。34は両端径18.8cm、最大幅30.6cm、高さ18.7cmを測る。上面に凹部を



第11図 出土遺物実測図



第12図 出土遺物実測図

残す。35は最大幅36.2cm、両端径14.0cm、高さ23.6cmを測る。形状はどちらも大鉢の胴にている。

36は宝匯印塔の相輪の破片である。相輪の下部を欠損し、最大幅12.1cmを測る。37は相輪の破片で先端と下部を欠損する。赤色顔料が付着し、最大幅7.2cmを測る。38は相輪と請花で、下部を欠損する。39は請花の破片で相輪を欠損する。形状は断面が角状を呈し、下位を横に走る細線刻と、上部に縦の細線刻を4本有する。最大幅14.8cm、高さ18.0cmを測る。40は伏鉢の破片である。中心部に二条の細線刻を有し、形状は逆台形である。最大幅17.4cm、高さ24.6cmを測る。出土地はすべてA地区Ⅲ～Ⅳ層である。

なお、その他の遺物として滑石製石錫・糸切り底の土師器Ⅲ・近世陶磁器などが出土している。いずれも小片であった。出土事実の報告にとどめる。（豊崎）

注①「益城郡家」熊本県文化財調査報告第32集 1978

②「城南町史」城南町 1965

### III 総 括

今回の調査は水路掘削地に限り、しかも水路の大半はすでに掘削が完了していたので、調査対象としたのはわずかに約200m<sup>2</sup>であった。しかも、湧水という悪条件であり、遺跡の全容を明らかにするものではなかった。しかし、遺物の出土状態や出土遺物が意味するところは、我々に大きな示唆を与えるものであった。

調査前の踏査においては、弥生式土器（後期）・土師器・須恵器・青白磁・近世陶磁器等が採集され、各時代に亘る重複遺跡であることが想定された。発掘調査においては、弥生後期・中世の包含層は確認できず、調査地におけるこの時期の遺物は二次的な堆積であると判定された。

B区においては、古墳時代の包含層及びピット状遺構が確認され、出土遺物の多くはこの部分から出土したものである。出土遺物は土師器と須恵器で、各遺物には大きな時期差は認められず、6世紀中葉～後半に比定されるものである。器種や出土状態からみると、生活跡に伴うものと考えられるが、住居跡等は確認できなかった。

A区とB区はわずか10m程しか離れていないが、両区の層序には大きな違いがある。両地区とも現在は水田化され、ほぼ同じレベルであるが、その層序を比較した結果、次のような想定が可能となった。すなわち、A地区の基層となるⅣ層（青灰色泥土）には桃の実や木の葉、流木等の有機質を多く含む軟質土で、その上に近世陶磁器を含む水田耕作土が三重に重なっている。したがって、この部分は本来湿地であったものを、近世に水田化し、少なくとも2度の埋立てにより現地形に至ったと考えられる。

これに対して、B地区の基層となるⅣ層（青灰色粘土）は硬質で、その上部に古墳時代の包含層がある。B地区のⅡ層（古墳時代遺物包含層）とA地区Ⅳ層を比較してみると、B地区Ⅱ層がわずかに高くなっている。したがって、古墳時代においては、A地区は低湿地、B地区は低湿地に接した微高地と考えることができ、上記の住居跡の存在とあわせて、付近に古墳時代の水田跡の存在も想定することが可能である。

遺跡地は現地表の標高3～3.5m前後の低湿地であり、古墳時代包含層は標高2m足らずである。熊本県においては、このような低湿地遺跡の調査例は数少なく、今後の調査の指標となろう。

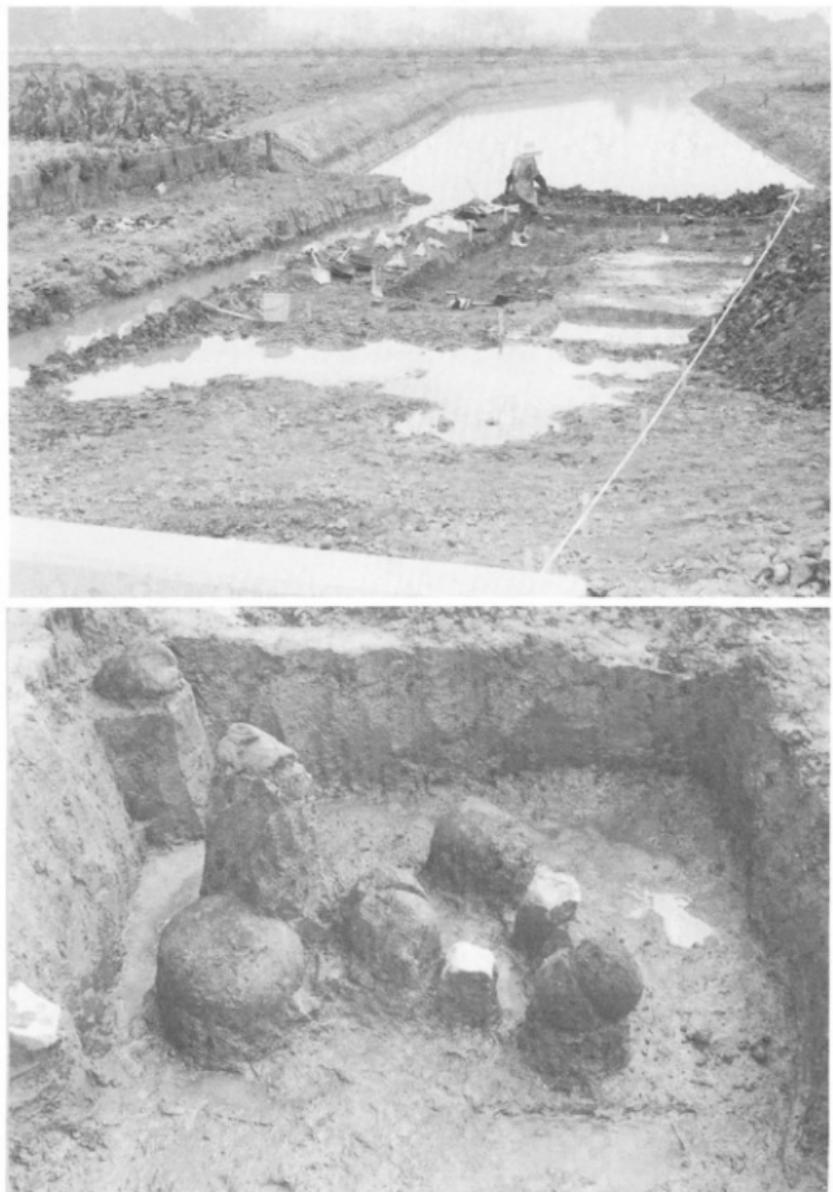
A地区から出土した五輪塔・宝匂印塔は、層位的に出土したものではなく、大半は水田耕作土に一括して埋め込まれたような状態で出土した。その形態は比較的古く、鎌倉時代に属する可能性が強い。<sup>注①</sup>このことは、発掘遺物及び週辺からの採集遺物に含まれる青白磁・滑石製石鍋・糸切り底の土師器皿等の年代観ともほぼ一致している。赤見前田遺跡の北西は、中世寺院の金福寺跡の比定地であるが、これらの遺物は金福寺に関連したものと考えてよかろう。今回の調査により、金福寺の年代の一端を知り得たことも収穫の一つであった。　（松本・豊崎）

注① 高木正文氏の教示による。

#### 〔付記〕

最後に、発掘調査を行うにあたり、地元赤見地区の多くの人たちに御協力をいただいた。特にいそがしい時間をさいて小まめに現場に足を運ばれ協力して下さった堀坂光雄区長さんや、寒風と湧水の中で黙々と作業された人たちに改めて感謝の言葉を申し上げます。

# 図 版

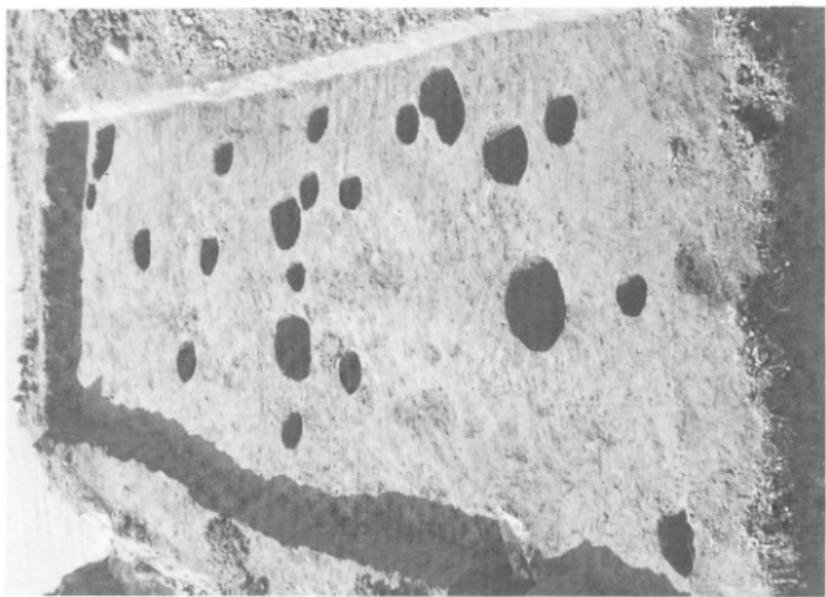


図版1 上：A地区調査風景 下：A地区D-2区遺物出土状況

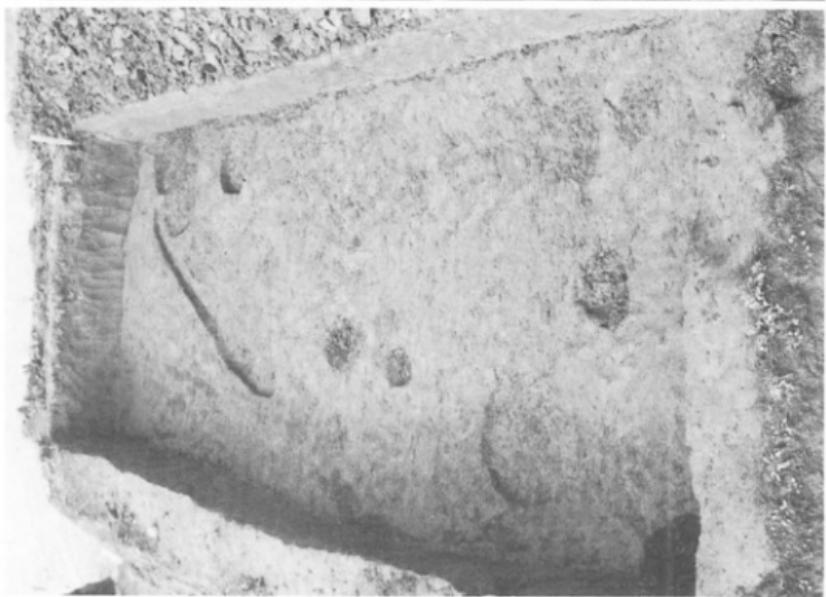


図版2 上：B地区 b-1 遺構検出状況 下：同区調査風景

図版3 上：B地区b—2Ⅱ層ビット群



下：同区Ⅲ層遺構検出状況

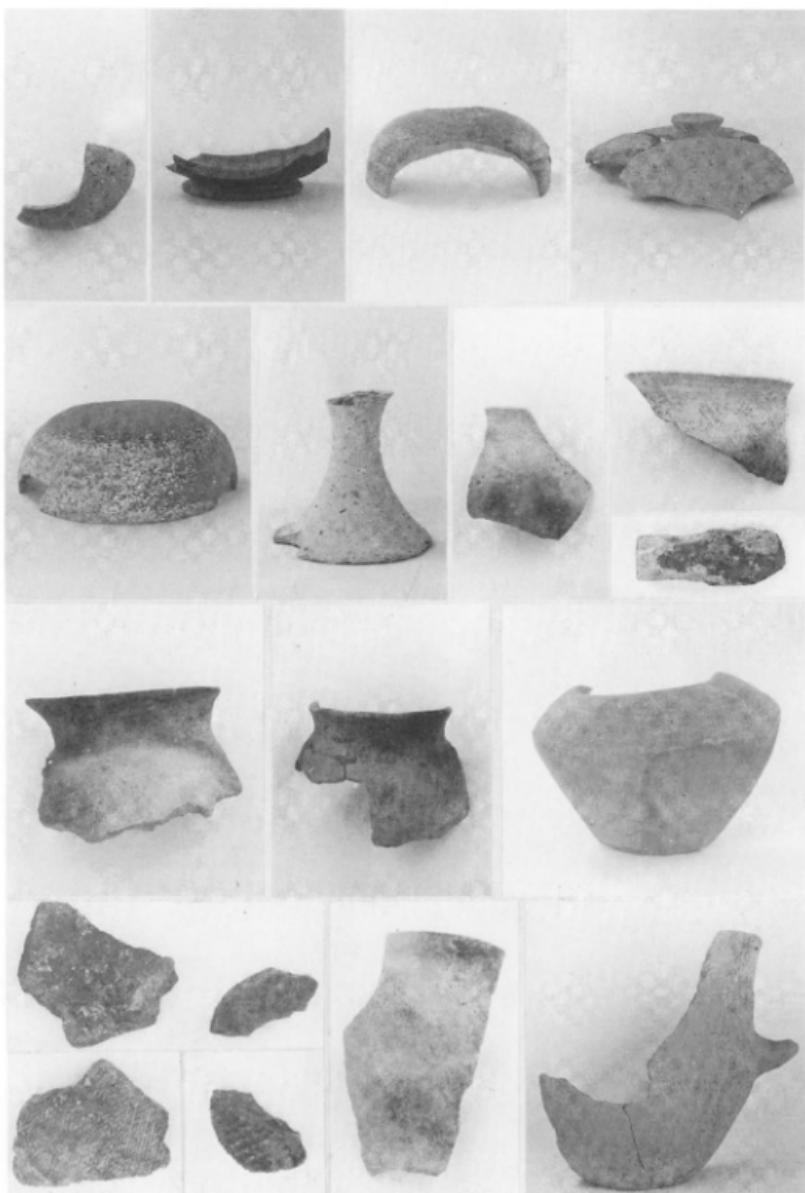




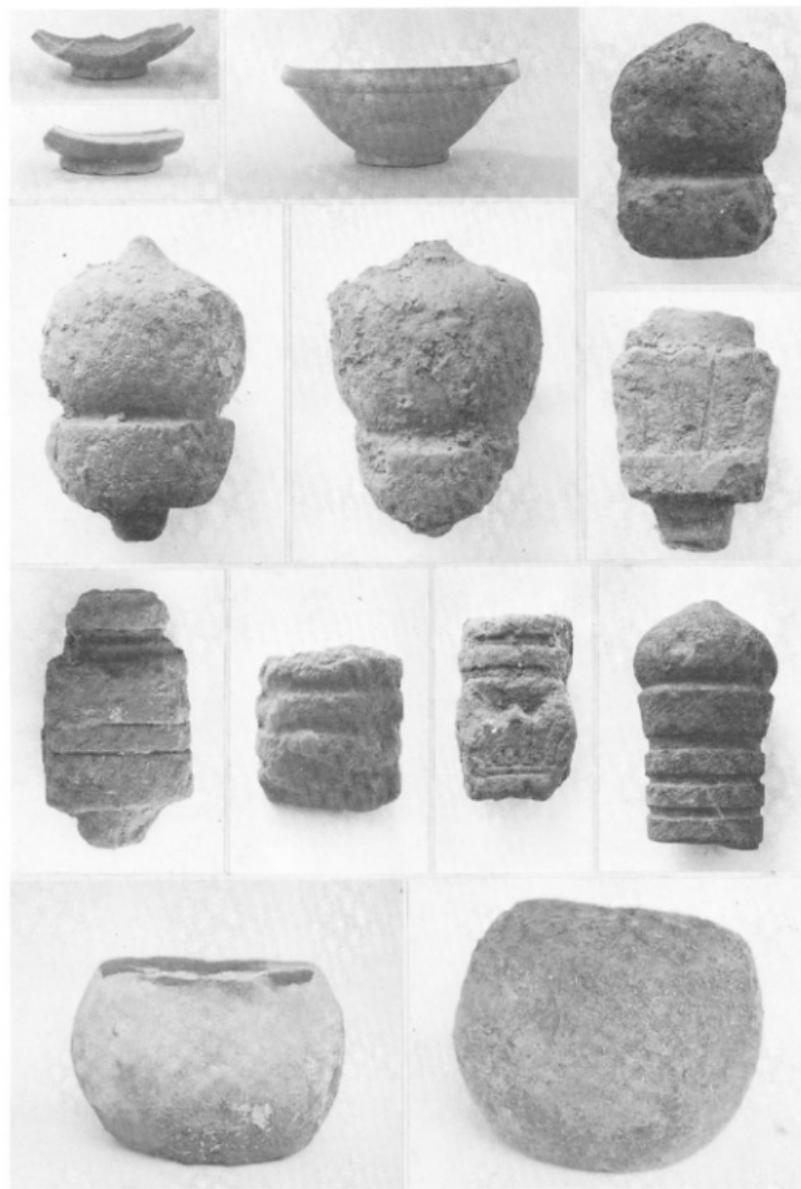
图版 4 上：A 地区遗物出土状况 下：B 地区Ⅲ层遗物出土状况



圖版 5 出土遺物



図版 6 出土遺物



図版 7 出土遺物

熊本県文化財調査報告 第53集

**赤見前田遺跡**

昭和56年3月31日

発行 熊本県教育委員会  
〒862 熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷 コロニ一印刷  
〒860 熊本市二本木3丁目12-37

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 53 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：赤見前田遺跡

発行：熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話： 096-383-1111

URL : <http://www.pref.kumamoto.jp/>

電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL : <http://www.kumamoto-bunho.jp/>